

「性は神聖」を考える 性崇拜思想の甦りに向けて

田中範孝（倫理研究所研究員）

はじめに

純粋倫理を提唱した丸山敏雄は、ひたすら性は神聖であることを説いた。倫理運動の火蓋を切る記念すべき論文となった「夫婦道」もまた、人類の文化、ひいては人類の繁栄に多大の影響を及ぼさずにはおかない性問題の根本に切り込んで、性の真義に触れ、その真相を明らかにしようという並々ならぬ決意のもとに寄稿せられたものであった。敏雄は研究論述の緒にあたって、自らの感慨をこう記している。

時あたかも、新日本建設の未曾有の難関に立つ。この時に当り、旧弊の一切をかなぐり捨て、いやしくも固陋迷眩のすべてをふり払って明澄日本の本性に立ち返らねばならぬとき、こうした努力もまたその一礎石たり得ることを喜びとする。⁽¹⁾

新生日本の再建に向けた丸山敏雄の並々ならぬ決意が伝わってくる。性道德の確立はその一步にほかならない。だが、今日の世相を概観するとき、性の問題はむしろますます昏迷の度を加えているように思える。改めてわれわれは丸山敏雄のこの意志を受けとめ、その提唱するところを吟味し直す必要があるのではないか。

敏雄は純粋倫理の実証研究を通して、性意識・性生活の正閏が人の生命、血液の流れに深く沈みこんで、全生活の動力として驚くほど広汎に作用していることを明らかにする中で、人間生活の種々の問題の背後に、性に対する誤った見方が頑迷に居座っていることに警鐘を鳴らした。

性現象の絶対意義は、純粋倫理の出現以前には、全く盲目の闇夜であり、ただなげやりのまま行くにまかせて、指導原理もなく放任された。旧道德の世界からは局外に排除され、旧教育の世界もまたタブーのうちに閉じこめて、敢てこれを解明しようとするものがなかった。あっても、その緒を得なかった。⁽²⁾
(略)ここに性の問題は、人間生活の幸不幸の分岐点に横たわる重大問題であることがわかって来た。

問題を繙く鍵は「性の誤謬」である。例えば、敏雄は「夫婦の性生活が完全でなければ、健康にも、経済にも、まして子女にも恵まれないのは当然である。(略)しかるに、普通の夫婦生活においては、単なる性生活に終わっている⁽³⁾」という。「完全な性生活」と「単なる性生活」との違いはいったいどこにあるのだろうか。これを掘り下げ、詳らかにすることは性の倫理をより具体化する上で好個のテーマにちがいない。それはそのまま「性の誤謬」を糺し、性を人間生活に正しく位置づけることになるのではないかと筆者は考える。

本稿では、何ゆえ丸山敏雄が性問題に着眼し、何を主張しようとしたのか。その論点をまず整理し、なぞ

るところから始めてみたい。そしてそれを現実生活に取り入れるには、いかにすればいいかについて論じてみたい。この点について丸山敏雄の論拠となったのは古代人の性愛の思想であった。彼らの根幹をなす絶対の神聖観を確立して、古代人そのままの純真にかえれと敏雄は説いたのである。だが、果たして、それは可能なのだろうか。その意図するところを十分に咀嚼しつつ、現代人がとるべき性へのスタンスについて考察してみようと思う。